

異なる培養土を用いたオンシジウムの栽培

野村 哲也

緒 言

熱帯・亜熱帯アメリカに広く分布するオンシジウム (*Oncidium* spp.) はおよそ400種からなり、草姿は小～大形で、樹木着生、岩上生または地生で形態は変異に富んでいる¹⁾。

指宿植物試験場では、オンシジウムをボラ土のみで栽培している。しかしボラ土ではあまり生育が良いとは思われず、各種の異なる培養土を用いて、ボラ土を対照に生育の調査検討を行った。

材料と方法

試験方法は、①ボラ土 (中玉)、②水苔、③くん炭 (当场水田で栽培した水稻籾殻を使用)、④ヤシ殻 (果皮 (外, 中果皮) を砕いたもの Coconut peat, Coco peat)、⑤くん炭 : ボラ土 = 1 : 1 (重量比) の5試験区とした。試験は温泉熱利用ガラス温室内で1994年1月19日から1995年1月上旬まで行った。材料は、1994年1月19日に株分けした1年生オンシジウムをプラスチック5号鉢に1本植えとし、各区10鉢とした。調査開始時の苗の平均草丈は24.5cmであった。実験は無肥料で行った。

調査は第1わき芽、第2わき芽、それぞれの草丈について行った。第1わき芽とは、母株から発生したもので、第1わき芽より発生したものを第2わき芽とした。

結果と考察

1) 第1わき芽 (第1, 2区)

第1わき芽の最も発生の早かったのは水苔区の2月9日で、くん炭区、ヤシ殻区、くん炭 : ボラ土 = 1 : 1区は3月10日、最も発生の遅かったのはボラ土区の3月16日であった。水苔を除いた全区で10鉢中全てに第1わき芽が発生した。

第1わき芽の生育が最も大きかったのは水苔区の平均23.9cmで、最も小さかったのはボラ土区の平均14.3cmであり、その差は9.6cmであった。9月8日以降は全区とも生育が緩やかになった。

2) 第2わき芽 (第3, 4区)

第2わき芽では、3月16日 (第1わき芽発生から6日目) にくん炭 : ボラ土 = 1 : 1区が発生し、次いで水苔区の8月17日で、最も遅かったのは10月5日に発生したヤシ殻区であった。

第2わき芽の草丈は、発生の早かった水苔区が最も大きく16cmで、発生の遅かったヤシ殻区が最も小さく5.9cmとなり、その差は10.1cmと大きかった。

また、水苔区には第3わき芽が1鉢、くん炭 : ボラ土 = 1 : 1区には第3, 4わき芽がそれぞれ1鉢づつ観察された。

これらのことからオンシジウムの栽培には、第1, 2わき芽の発生日数、生育状況からみても水苔利用が適していると思われ、次いでくん炭区、くん炭 : ボラ土 = 1 : 1重量比区が良く、今まで使用していたボラ土では、生育は他区に比べ劣ることが明らかとなった。

ラン類では、株数が多くボリュームのある方が花が着きやすいという事から、現在までの調査では、商品価値の面においても水苔区が良いと思われる。但し水苔は単価が他と比べて高価であり、年に1～2回の植え替えをした場合、相当な費用がかかるのに対し、次いで成績の良かったくん炭は当场で入手、作成できるので資源の有効利用、コスト節約の点からも今後試験を続けていく必要がある。また、全区とも無肥料で試験を行ったので、培養土と施肥との関係や着花状況も検討したい。

1) 唐澤耕司・合田弘之：園芸植物大辞典5. P. 303-314, 塚本洋太郎監修, 小学館, 東京 (1989)

